

鬼城俳句俳論集

復刊版



群馬地域文化振興会

村上鬼城著

鬼城俳句俳論集

創元社



昭和十二年四月 七十三歳
於觀音山白衣觀音社務所脇

序

高濱 虚子

村上鬼城といふのは既に舊い名前である。「新俳句」を讀んだ人はすでに鬼城といふ名前に親しみを持つて居ねばならぬ。獨り俳句のみならず、ホトトギスの早い頃の寫生文欄に鬼城の名前はしばしば現はれてゐる。それが暫くの間、句にも文章にも餘り其名を見なかつたのであるが、數年前高崎に俳句會が催されて鳴雪翁と私とが臨席した時、其席上に鬼城君のあることを私は初めて知つた。實は其會に列席するまで、此日鬼城君に會はうといふことは格別待ち設けてゐなかつたことで、私は鬼城君が高崎市鞆町の人であることは十分承知してゐながら此席上に同君を見受けようとは豫期しなかつた程、私は其頃同君を頭に止めてゐなかつた。といふのも畢竟同君の名を其頃ホトトギス誌上に見ることが稀であつて、同君は同じ時代の多くの俳人の如く今はもう俳壇に氣を腐らして、ホトトギスも見ねば俳句も作らずに居るといふやうな状態にあるのであらうと豫¹してゐたのであつた。ところが此日地方で社會的地位を保つて居る多くの人とか若くは衝氣一杯の青年俳人等が我物顔に振舞つてゐる蔭の方に、一人の稍々年取つた村夫子然たる人が小さくなつて坐つてゐた。それが初對面の鬼城君

であつた。其時は別に運座があつたわけでもなく課題句を二句宛持ち寄つたのを鳴雪翁と私とが選抜するのであつたが、其時私の天に取つた句が計らずも鬼城君の句であつた。僅か一人二句宛の出句であるから十分に同君の手腕を認める事も出来なかつたけれども、其二句共に稍々群を抜くものであることは直ちに了解された。其時俳話をせよとのことであつたので、私は何かつまらぬ事を喋舌つた。大方忘れて仕舞つたが、唯此地方に俳人鬼城君のあることを諸君は忘れてはいかぬといふやうなことを言つたことだけは覚えてゐる。其後私等は席を改めて會食した其中に鬼城君も見えた。鬼城君が不折君以上の豊であることは此夜初めて知つた。同君は極めて調子の迫つたやうな物言ひをしながら、こんなことを言つた。

「どうも危くなつてとても人中へは出られません。ちつとも耳が聞えないのだから、人が何を言つてゐるのか更に解らない。どうも世の中が危つかしくて仕方がない。今夜のやうな席に出たことは今日がはじめてである。」とそんなことを言つて笑ひもせずまじ／＼と室の一方を視詰めてゐた。

其後同君の句を見る機會は非常に多くなつた。獨り高崎の俳人仲間で頭角を現はしてゐる許りでなく雑詠の投句家としても嶄然として群を抽んでゐて、今の若い油の乗り切つてゐる俳人諸君と伍して少しもヒケを取らぬばかりか流石に多年、練磨の跡が見えて蔚然として老大家の觀を爲してゐる。

もし同君を見て單に偏狹なる一畸人となす人があるならば、それは非常な誤りである。同君が高崎

藩の何百石といふ知行取りの身分でありながら耳が遠いといふことの爲めに適當な職業も見つからず、僅かに一枝の筆を力に陋巷に貧居し、自分よりも遙かに天分の劣つてゐると信ずる多くの社會の人々から輕蔑されながら、ちつとそれに堪へて痼癩の蟲を噛み潰してゐるところに、溢れる涙もあれば沸き立つ血もある。併し世間の人は其を了解するのに餘り近眼である。

或る時同君は私に次のやうな意味の手紙をよこしたことがあつた。

「人生で何が辛いと言つたところで婚期を過ぎた娘を持つてゐる程苦痛なことは無い。自分は貧乏である。社會的地位は何もない。さうして婚期を過ぎた娘を二人まで持つてゐる。私はそれを思ふ度にちつとしてゐられなくなる。かと言つて何うすることも出来ない。いくらもがいたところで貧乏は依然として貧乏である。髒は依然として髒である。今日も一日勞働をばたして家へ歸つて來て此二人の娘を見た時に、私の胸は張り裂けるやうであつた。私はもうちつとしてゐられなかつた。……」

同君の眼底には常に此種の涙が溢へられてゐる。同君は只かりそめに世を呪ひ、人を嘲るやうな、そんな輕薄な人ではない。同君の寫生文が常に刺のある皮肉な調子のものであるが爲めに同君を銜氣縱横の人であると解釋するのは皮相の見である。同君の皮肉は、其忠直なる眞面目の心からほとばしり出るのである。其人を刺すやうな刺の先には一々暖い涙の露が宿つてゐる。同君が婚期を過ぎた二人の令嬢——尤も今日では共に芽出度く片附いて居られることゝ想像するが——に向つて注ぐ所の涙

は、纏て禽獸草木に向つて、時には無性の石ころに向つてすらも注ぐところの涙となるのである。同君の句を讀むものは、不具、貧、老等に深い根ざしを持つてゐて憤りも、悲しみも、嘆きも乃至慰藉も安心も、總てそこから出立してゐることを明らかにするのであらう。

世を戀うて人を怖るゝ夜寒談

鬼城

「世の中が危つかしくて仕方が無い」と言つた同君の心持は其時の言葉以上に深く強く此句に現はれてゐる。同君が世の中に出ないのは人を怖れて出ないのである。世を厭うて出ないのではない。同君が世間の人を怖るゝのは世間の人が皆聾でないからである。世間の人が皆聾であつたならば、同君は大手を振つて人に馬鹿にされず、人に壓迫されずに大道を濶歩することが出来るのである。只世間の人が皆よく聞える耳を持つてゐる。さうして耳の遠い聾者や眼の見えぬ盲者などを、輕蔑する獸性を持つて居る。

同君が人を怖るゝのは其爲である。恰も人間が人間以上の武器——爪とか牙とか——を持つて居る猛獸を恐れるのと同じやうな心持である。そこで何彼につけて尻込みして人中に顔を出さずに居ると、近眼な世間の人は直ぐ畸人だといふ一言のもとに軽く其人の心持を付度して仕舞ふ。さうして自分等の住んでゐる世間とは全く没交渉な人のやうに解釋して仕舞ふ。何ぞ知らん鬼城君の世間を戀ひ慕ふ心持は普通の人間以上であつて、普通の人間以上の熱い血は其脈管の中に波打つてゐるのであ

る。此熱情は或時は自己に對する滑稽となり、或時は他の癡人若くは人間よりも劣つてゐる生物等の上溢れるやうな同情となつて現はれるのである。

治 躰 酒 の 醉 ふ ほど も なく さ め に け り 鬼 城

春 の 夜 や 灯 を か こ み 居 る 盲 者 達 同

瘦 馬 の あ は れ 幾 歳 や 秋 高 し 同

己 が 影 を 慕 う て 這 へ る 地 蟲 かな 同

冬 蜂 の 死 に ど こ ろ なく 歩 き け り 同

夏 草 に 這 上 り た る 捨 躰 かな 同

治躰酒といふのは社日に酒を呑むと躰が治るといふ言ひ傳へから其日に飲む酒を治躰酒と言つてゐる。そこで自分も躰だから、其治躰酒をのんだがばつと酔つたと思ふ間もなく醒めて仕舞つたといふのである。初めから治躰酒で躰が治るといふやうな事にはさう信用も置いては居ない。けれどもさういふ言傳へがある以上兎も角も飲んで見る氣になつて飲んだ。一時はつと酔つた時は好い心持であつたが、忽ち醒めて仕舞つて、もとの淋しい躰に戻つて仕舞つた。そのはかない醉に軽い滑稽を感じる。同時に又其酒を飲んでみる氣になつて飲んだ自分に對しても軽い滑稽を感じる。此「治躰酒」のやうな句を讀んで只輕みのみを受取る人は未だ至らぬ人である。此表面に出てゐる輕みの底には躰を

悲しむ悲痛な心持が潜在してゐるのである。

「春の夜や」の句は聾者が盲者に寄せた同情の句で春の夜の長閑な心持を味ふのは必ずしも健康な人に限られた譯ではなく、不具の人も亦これを樂むのである。少くともこれを樂しまうとする欲望は十分にあるのである。眼の見えぬ盲者に灯は必要のないことであらうと考へるのは普通の人の考へであつて、矢張春の夜らしく灯を置いたもとに盲人達は圍坐して樂しげに語りつゝある。其樂しげに語りつゝあるといふことのうちに反つて淋しみがある。盲者が灯を圍んでゐるといふことは一つの矛盾で滑稽である。此句も表面には滑稽の味があつて裏面には心の痛みを隠してゐる。

「瘦馬の」句は癡人に對する同情が、動物に及んだものであつて、馬も肥え太つたものであれば、恰も世に時めく人の様に所謂天高く馬肥えたりといふ時候に高く嘶いて居るのを見たところでそれは當然の事で別に人の注意をも引かない。少くとも此作者はさういふ肥馬に對しては餘り同情はない。所がそれは瘦馬である。それが矢張他の肥馬同様、秋になつて空の高く晴れた時分に好い心持になつて機嫌よく働いてゐる——瘦馬には不似合な重い荷物を運んでゐる——へと／＼となつて疲れ切つてゐるか、若くは不機嫌で馬子の言ふ事も聞かずに打たれても撲られても動かずにゐるといふ風なのならば、同じく瘦馬の憐れむべき所を見出したにしても最早疲れ切つて用をなさなくなるとか或は不貞腐れて馬子の意に背くとかそこに人間に對して有意若くは無意の反抗がある。ところが此句に現はれ